

《谷崎源氏》考（二）

——『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告（続）——

中村ともえ
三嶋潤子

三、七 「紅葉賀」 ……初刊卷二、愛蔵本卷一

番号	分類	旧訳	I	新訳初刊	頁	行	新訳愛蔵本	II	新々訳	原文	注
8	A3	お心づもり		心づもり	47	10	お心づもり	○	お心づもり	御心まうけ	
7	A1	御覧遊ばされる		御覧遊ばす	47	8	御覧になる	○	御覧になる	ほの見たまふ	
6	A1	お聞き遊ばして	○	お聞き遊ばして	47	7	お聞きなされて	○	お聞きなされて	―	
5	F	それぞれ特に	○	それぞれ特に	42	2	特に別に	○	特に別に	ことにわかちて	
4	E1	対屋「たいのや」	○	対屋「たいのや」	41	14	対「たい」の屋「や」	○	対「たい」の屋「や」	対「たい」	
3	F	おとし給ひ		お落しになります	37	8	お拭ひになります	○	お拭「ぬぐ」いになります	のこひたまひ	
2	A3	おん涙	○	おん涙	37	8	涙		おん涙	涙	
1	A1	御覧遊ばさない	○	御覧遊ばさない	37	2	御覧になりませぬ		御覧になりません	見たまはざらむ	

番号	分類	旧訳	I	新訳初刊	頁	行	新訳愛蔵本	新々訳	原文	注
1	Q	世をひかすほどに		世間の評判になる程に	79	7		に世間の評判になるほどに風流	好ましく世の囀くばかり	
2	E2	畜宮「さいくう」	○	畜宮「さいくう」	80	1	畜宮「さいくう」	畜宮「さいくう」	畜宮「さいくう」	

三、九「葵」：初刊卷二、愛蔵本卷二

[illegible]

三八「花宴」：初刊卷二、愛蔵本卷二

12	11	10	9
F	E1	Q	E2
無駄に立ちつくして	立ち優「まさ」る	(削除)	(削除)
	○		
手ぶらで	立ち優「まさ」る	御覧になりますでせうに	心許ながって
63	58	49	48
7	6	1	6
逢はずに	立ち勝「まさ」る	お拝みになりますでせうに	心許「もと」ながって
	○		
手ぶらで	立ち勝「まさ」る	御覧になりますでせうに	御様子を知りたくて
立ちながら	ことにまゐる	見たてまつらせたまひてむ	心もなくて
			1

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
A2	A3	A3	A2	A2	Q	A3	A3/D	A2	A2	Q	A3	E1	A3	E1
思し召される	おん眼	御危篤であられた	思し召して	思し召していらつしやつたが	ぼうつと上氣したやうなお顔を していらして、…おん黒 髪に非常に長たくさんおあ りになるのを	御容態	おいたはしうお思ひになり	お思ひになるが	思し召すのであつたが	所争ひを遂「お話し申し上げ る	御見物「『けんぶつ』にはお 出ましにならない	立ち優「まさ」つて	おすぐれにならないので	《削除》
○	○	○	○						○			○	○	
思し召される	おん眼	御危篤であられた	思し召して	思し召していらつしやいます のに	ぼうつと上氣したやうな血色 をしていらして、御髪「お ぐし」の非常に長たくさん ありますのを	お容態	いたはしうお思ひになり	思し召します	思し召すのですが	所争ひを遂「申し上げる	御見物「『けんぶつ』なさい ませぬ	立ち優「まさ」つて	おすぐれになりませぬので	空怖ろしき
102	101	100	99	99	96	95	92	89	89	86	86	84	82	80
6	6	8	15	12	3	5	2	14	9	5	5	14	7	10
思つていらつしやる	眼	御危篤であつた	お思ひなされて	お思ひになつていらつしやい ますのに	照り映えてあるおん黒髪の色 合も花やかに、非常に長く房 々としてあますのを	容態	いたはしく	お思ひになります	お思ひになるのですが	所争ひの件を申し上げる	御見物「『けんぶつ』なされ ませぬ	立ち勝「まさ」つて	すぐれませぬので	空恐ろしき
								○	○			○		○
お志の深い	おん眼	御危篤であられた	お思ひになつて	思つていらつしやいますのに	ぼうつと上氣したやうな血色 をしていらして、お髪の非 常に長たくさんありますの を	御容態「ようだい」	いたわしくお思ひになり	お思ひになります	お思ひになるのですが	所争ひを遂「『ちくいち』申 し上げる	御見物「『けんぶつ』なさい ません	立ち勝「まさ」つて	おすぐれになりますので	空恐ろしき
―	目	ゆゆしかりし	とて	思ひきこえたまへるに	色あひいと華やかにて、御髪 「みぐし」のいと長うこちた さを	さま	いとほしう思し起こして	思す	思せど	所争ひをまねびきこゆる	物見たまはず	出でばえ	なやましければ	恐ろしければ
														1

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
D	D	A3	Q	A2	D	E1	E1	Q	F	A3	E1	F	A2
全体に淋しく、見えない感じがする	まだ一向に存じませぬのに	お思ひになるであらう	そして皆まで承らずに	思し召しながら	などとお案じ申し上げてゐると	含羞「はにか」んで	優「まさ」つて	物の分らない	なまめいた	分つて貰へる	懐かしさうに	なまめかしさが添うて	思し召すままに
	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
全体に淋しく、はえない感じなのでした	まだ一向に存じませぬのに	お感じになるであらう	そして皆まで承らずに	思し召しながら	などとお案じ申し上げてゐますと	含羞「はにか」んで	優「まさ」つて	物の分らない	なまめいた	分つて貰へる	懐かしさうに	なまめかしさが添うて	思し召しますので
125	122	122	121	121	120	118	118	115	114	112	112	104	103
11	10	7	13	6	5	13	4	5	6	11	3	4	7
淋しく、はえない感じなのでした	まだ存じませぬのに	感じるであらう	惟光は皆まで承らずに	お思ひになりながら	とお案じ申し上げてゐますと	羞洪「はにか」んで	勝「まさ」つて	一向に物の分らない	優雅な	分つて貰へる	懐かしさうに	優雅さが加はつて	お思ひになりますので
				○	○		○				○		○
物足りなく、はえない感じなのでした	まだ一向に存じませぬのに	お感じになるであらう	そして皆まで承らずに	お思ひになりながら	とお案じ申し上げてゐますと	はにかんで	勝「まさ」つて	ものの分らない	なまめかしい	分つてもらえる	懐「なつか」しそうに	なまめかしさが添うて	お思ひになりますので
はえなくさうさうしけれ	まだならはぬものを	思さむ	惟光、たしかにもうけたまはらで	見たてまつりたまひて	と見たてまつり嘆くに	恥ぢらひたまへる	まさりたまへり	ひとへに思ひやりなき	なまめきたまへり	見はてたまひなむ	なつかしう	なまめかしきまさりて	―

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
A1	Q	Q	A1/C	Q	D	A2	E2	A2	Q	E1	Q	A3	分類
〔削除〕	〔削除〕	〔削除〕	御覧にならないのを	ましてほんのたまさかに	ほんに、もう此の頃は御容貌「こようばう」も	思し召す	御発足	思し召されて	昔なつかしく、さまさまの	対屋「たいのや」	お迷ひになりながら、	お心	旧訳
						○		○		○			I
おん答「いら」へも遊ばされませぬ	せめて此方「こちら」を向いて下さいまし	馳せつけて	御対面遊ばさないのを	ましてほんのたまさかにばかり	もう此の頃は御容貌「こようばう」も	思し召す	御発足「はつそく」	思し召されて	昔なつかしく、さまさまの	対屋「たいのや」	お迷ひになりながらそれも	心	新訳初刊
148	147	146	145	143	137	134	133	133	131	129	128	128	頁
4	14	6	4	13	7	10	11	7	8	11	11	5	行
おん答「いら」へもなされませぬ	せめて此方「こちら」を見向いて下さいまし	馳せつけて	御対面なされませぬのを	ましてたまさかばかりに	御容貌「こようばう」も	お思ひになる	御発足「はつそく」	お思ひなされて	昔なつかしく、さまさまの	対「たい」の屋「や」	お迷ひになりながら、それも	お心	新訳愛蔵本
						○	○	○	○	○	○	○	II
おん答「いら」えもなさいません	せめてこちらを向いてくださいまし	馳せつけて	御対面なされないのを	ましてほんのたまさかにばかり	もう此の頃は御容貌「こようばう」も	お思ひになる	御発足「はつそく」	お思ひなされて	昔なつかしく、さまさまの	対「たい」の屋「や」	お迷ひになりながら、それも	お心	新々訳
ず	答「いら」へも聞こえたまは	参りて	見たてまつりたまはぬを	ましてめづらしきほどにのみ	御容貌「かたち」も	思せど	御出立「いでたち」	思し	昔おぼえたるに、あはれと思し乱るる	対「たい」	思しわづらひながら、	御心	原文
4	3	2							1				注

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
D	Q	F	D	A3	E1	A3	G	A3/Q	D	A3/Q	Q	F	A3	Q	A3
女房たちなどは	と	阿娜めいておいでになって	さすがに時を忘れない	催し給うて	対屋「たいのや」	御辛抱	名香「みやうがう」	懼つてばかりもゐられないで	十日を過ぎた頃に	おいとほしうてなりませぬので	考へられ給ふのであつたが	なまめいた	お菌	お出入「でい」りなさる度毎に	お可愛らしい
○	○			○	○				○	○		○			
女房たちなどは	と	阿娜めいてめます	さすがに時を忘れずにゐる	催し給うて	対屋「たいのや」	御辛抱	名香「みやうかう」	懼つてばかりもゐられないで	十日過ぎ頃には	おいとほしうてなりませぬので	お考へになりますけれども	なまめいた	菌	お出入「でい」りなさるにも	可愛らしい
167	167	166	166	166	166	164	164	162	162	158	152	152	151	151	151
11	11	14	13	10	2	4	2	7	2	6	11	9	15	5	3
女房たちは	などと	優雅なのです	時を忘れずにゐる	催して	対「たい」の屋「や」	辛抱	名香「みやうがう」	懼り給はず	十日過ぎ頃に	おいとほしう存ぜられますので	お考へになるのですが	優雅な	お菌	かうしてお出入「でい」りなさるにも	お可愛らしい
○		○			○		○	○							
女房たちは	と	優雅なのです	さすがに時を忘れずにいる	催し給うて	対「たい」の屋「や」	御辛抱	名香「みようこう」	懼つてばかりもいられないで	十日過ぎ頃に	おいとおしゅうてなりませんので	お考へになりますけれども	なまめいた	菌	お出入「でい」りなさるにも	可愛らしい
人々	など	なまめかし	時を忘れぬ	ものあはれなるけしきに	対「たい」	たへがたくて	名香「みやうがう」	えしも懼「はばか」りたまはで	十余「よ」日ばかり	いとほしう思ひたまへられはべりて	思ひあかしても	なまめきたる	御菌	かく出で入りたまふにも	かなし
							5								

1	番号
A3	分類
気がお引けになりながらも	旧訳
○	I
気がお引けになりながらも	新訳初刊
178	頁
8	行
気が引けながらも	新訳愛蔵本
○	II
気が引けながらも	新々訳
つつまじけれど	原文
	注

三、十一「花散里」……初刊巻二、愛蔵本巻一

38	37	36	35	34	33	32	31	30
F	F	A3	A1	D	Q	Q	F	F
都合	巧い工合に	這入つて来る	御意見を遊ばされましても	あてにして甘えてをられる	本気になつても下さらず	后宮へお訴へになるのであつた	嘆いて	不平を云ふ
○	○	○	○				○	○
都合	巧い工合に	這入つて来る	御意見を遊ばされましても	頼みにして甘えてゐる	相手になつてくれませず	后宮へお訴へになります	嘆いて	不平を云ふ
176	176	176	176	176	174	174	168	167
9	9	8	5	5	12	9	3	15
工合	謀計「はかりごと」を	這入つて来られる	御意見をなされましても	頼みに甘えてゐる	相手にせず	后宮へもお訴へになります	悲しんで	歎息する
						○		
都合	巧い具合に	はいつて来る	御意見をされましても	頼みにして甘えてゐる	相手になつてくれませず	后宮へもお訴へになります	嘆いて	不平を言う
たより	さるへきごとども	入りのせらるらむ	制しのためはむに	頼みにして、あまえてはべる	心もとめず	宮にも「うれ」へきこえたまふ	悲し	嘆く

三、十二「須磨」…初刊卷三、愛蔵本卷二

番号	分類	旧訳	I	新訳初刊	頁	行	新訳愛蔵本	II	新々訳	原文	注
8	E2	人形「ひとがた」	○	人形「ひとがた」	46	10	人形「ひとがた」		人形「ひとがた」	人形「ひとがた」	
7	E2	琴「きん」	○	琴「きん」	36	6	琴		琴「きん」	琴「きん」	
6	Q	ないものはない	○	ないものはない	23	9	ないものはない		ないものはない	なくなむ	4
5	A3	思はう		思ひ申しませう	21	2	お思ひ申しませう	○	お思ひ申しませう	思ひきこえん	
4	Q	尚侍「ないしのかみ」	○	尚侍「ないしのかみ」	15	11	尚侍「かいしのかみ」		尚侍「ないしのかみ」	尚侍「ないしのかみ」	3
3	G	白氏文集「はくしもんじふ」		白氏文集「はくしもんじふ」	14	13	白氏文集「はくしもんじふ」	○	白氏文集「はくしもんじゅう」	文集	2
2	Q	彼方此方「あちらこちら」	○	彼方此方「あちらこちら」	10	7	此方彼方「あちらこちら」		あちらこちら	所どころ	1
1	E1	優つて	○	優つて	8	1	勝つて	○	勝「まさ」つて	たちまされり	

三、十三「明石」…初刊卷三、愛蔵本卷二

番号	分類	旧訳	I	新訳初刊	頁	行	新訳愛蔵本	II	新々訳	原文	注
3	A1	遊はす	○	遊はす	63	1	なさる	○	なさる	遊はす	
2	B	擬「よそ」へられて		似通つてゐる	61	6	似通つてゐる	○	似通つてゐる	思ひまがへられたまふ	
1	Q	鎮め守り給へ。まこと		鎮め守り給へ。寔「まこと」	51	9	鎮め守り給へ。寔「まこと」		鎮「しず」め守り給う。まこと	鎮「しず」め護「まも」りた	

8	7	6
A2	Q	G
思し召されて	御幼少でいらつしやいますから、少しは	人情でございますものを
○	○	
思し召されて	御幼少でいらつしやいますから、少しは	人情でございますものを
123	121	121
4	14	13
お思ひなされて	御幼少でいらつしやいますから、少しは	人情でございますものを
○	○	○
お思ひなされて	御幼少でいらつしやいますから、少しは	人情でございますものを
思しのたまひて	いとなき御齡「下はひ」におましますを、すこし	わさにはべるを
		5

三、十五「蓬生」…初刊卷三、愛蔵本卷二

2	1	番号
F	B	分類
お心やすう	お珍しう	旧訳
		I
お気楽な	珍しう	新訳初刊
142	126	頁
13	9	行
お気の毒な	珍しく	新訳愛蔵本
○	○	II
お気の毒な	珍しく	新々訳
心やすかりける	ありがたう	原文
		注

三、十六「関屋」…初刊卷三、愛蔵本卷二

なし

三、十七「絵合」…初刊卷三、愛蔵本卷二

3	2	1	番号
E1	E2	E1	分類
優つて	軸【いへ】	打ち臥して	旧訳
○	○		I
優つて	軸【いへ】	倚り添うて	新訳初刊
168	164	160	頁
14	7	13	行
勝つて	軸	寄り添うて	新訳愛蔵本
○	○	○	II
勝【まぬ】つて	軸	寄り添うて	新々訳
まぬりて	軸【いへ】	添ひ臥【ひ】して	原文
			注

三、十八「松風」……初刊卷三、愛蔵本卷二

番号	分類	旧訳
2	E1	含羞「はにか」んで
1	Q	可愛らしい
		新訳初刊
		新訳愛蔵本
		新々訳
		原文
		注

三、十九「薄雲」……初刊卷四、愛蔵本卷二

番号	分類	旧訳
4	E1	《削除》
3	E1	優「ま」る
2	E1	《情「なさけ」なく》
1	D	来るやうになさい
		新訳初刊
		新訳愛蔵本
		新々訳
		原文
		注

三、二十「慥」……初刊卷四、愛蔵本卷二

番号	分類	旧訳
2	E2	《削除》
1	E2	神事「しんじ」
		新訳初刊
		新訳愛蔵本
		新々訳
		原文
		注

三、二十一「乙女」……初刊卷四、愛蔵本卷二

番号	分類	旧訳	新訳初刊	頁	行	新訳愛蔵本	新々訳	原文	注
1	G	大宮	お宮	73	7	大宮	大宮	大宮	1
2	A3	ねんころになりたい	ねんころになりたい	90	2	ねんころにしたい	ねんころにしたい	見るわざしてん	
3	A1	お立ち遊はす	お立ち遊はす	98	2	お立ちになる	お立ちになる	還「かへ」らせたまふ	
	○					○	○		

三、二十二「玉鬘」……初刊卷四、愛蔵本卷二

番号	分類	旧訳	新訳初刊	頁	行	新訳愛蔵本	新々訳	原文	注
1	C	上げようとするのが	上げたがつてゐるのが	109	5	上げたがつてゐますが	上げたがつてゐるのが	消息「せうそく」がる	
2	Q	大夫「たいふ」の監「げん」	大夫「たいふ」の監「げん」	110	3	大夫「たいふ」の監「げん」	大夫「たいふ」の監「げん」	大夫監「たいふのげん」	1
3	E2	遣り取り	遣り取り	132	12	遣「や」り取り	(移り住んだり)	まじらはむ	
4	E1	含羞「はにか」んで	含羞「はにか」んで	137	9	羞洪「はにか」んで	はにかんで	おぼつかなく	
	○								
							II		

三、二十三「初音」……初刊卷四、愛蔵本卷二

なし

番号	分類	旧訳		新訳初刊		頁	行	新訳愛蔵本		II	新々訳	原文	注
1	E2	画「か」いた		画「か」いた		160	7	画いた			画「か」いた	描「か」いたらむ	

〔注〕

七 「紅葉賀」

1 「紅葉賀」 9、10 に対応する部分で「旧訳」から削除されているのは、藤壺に男御子が誕生し、源氏は何とかして対面したが、藤壺は拒絶して過去の過ちを思い悩むという内容である。

八 「花宴」

なし

九 「葵」

1 「葵」 3 に対応する部分で旧訳から削除されているのは、源氏が藤壺への思いを桐壺帝に知られることを恐れるという内容である。

十 「賢木」

1 「新訳」初刊の再版（奥付によれば、初版巻二発行は昭26・9・10、再版は昭26・10・10である）で読点が加えられ、愛蔵本以下に受け継がれる。

2 「新訳」愛蔵本の「馴」は誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受

け継ぐ。新書版は「馳」、愛蔵版は「馴」。

また「旧訳」では、「新訳」初刊巻三145頁1行～150頁7行に相当する箇所が削除・省略されている。「賢木」11～13に対応する部分で「旧訳」から削除されているのは、源氏と藤壺の密会という内容である。この箇所の訳は、「新訳」に先立ち、「藤壺——「賢木」の巻補遺——」（中央公論文芸特集「昭24・10、以下「藤壺」）として発表された。「藤壺」では「馳せつけて」。

3 「藤壺」では「せめて此方を見向いてなりと下さるやうに」。

4 「藤壺」では「おん答」「いら」へも遊ばされず。

5 「旧訳」・「新々訳」、また原文のルビが「みやうがう」（「新々訳」は「みようこう」）であることから、「新訳」初刊の「みやうかう」は誤植の可能性が高いと判断した。

十一 「花散里」

なし

十二 「須磨」

1 「新訳」愛蔵本の「此方彼方」は誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受け継ぐ。新書版は「彼方此方」、愛蔵版は「此方彼方」。

2 「旧訳」・「新々訳」が「もんじふ」・「もんじゅう」であることから、「新訳」初刊の「ふんじふ」は誤植の可能性が高いと判断した。

3 「旧訳」・「新々訳」、また原文が「ないしのかみ」であることから、「新訳」愛蔵本の「かいしのかみ」は誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受け継ぐ。新書版は「ないしのかみ」、愛蔵版は「かいしのかみ」。

4 「旧訳」・「新々訳」が「ないものはない」であることから、「新訳」愛蔵本の「ないものはない」は誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受け継ぐ。新書版・愛蔵版は「ないものはない」。

十三 「明石」

1 「新訳」愛蔵本の「たとり」は誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受け継ぐ。新書版は「たより」、愛蔵版は「たとり」。

2 「旧訳」・「新々訳」、また原文が「そち」であることから、「新訳」愛蔵本の「さち」は誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受け継ぐ。新書版は「そち」、愛蔵版は「さち」。

十四 「澤標」

1 「旧訳」では、「新訳」初刊巻三92頁4行～93頁5行の一段落に相当する箇所が削除されている。削除されているのは、退位を考える朱雀帝が、臘月夜尚侍に向かって、源氏と自分を比較するような発言をするという内容である。

2 「旧訳」・「新々訳」、また原文が「は」であることから、「新訳」愛蔵本の「に」は誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受け継ぐ。新書版は「は」、愛蔵版は「に」。

3 「旧訳」のルビが「そちら」、「新々訳」が「そちら」であることから、愛蔵本の「こちら」のルビは誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受け継ぐ。新書版は「そちら」、愛蔵版は「こちら」。

4 「旧訳」では、「新訳」初刊巻三118頁15行～119頁2行に相当する箇所が削除されている。削除されているのは、六条御息所の娘の前斎宮に対する源氏の好色心という内容である。

従来の、「旧訳」における削除は、源氏と藤壺の密通など天皇への不敬に当たる部分に関して行われたと考えられてきた。不敬という観点では捉えられない削除箇所が多数存在することを明らかにした大津直子は、「旧訳」に「同居する異性に向けた性的なまなざし」という固有の禁忌性、タブー意識があると説く（『二つの谷崎源氏——國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿より見る一考察——』（『文学・語学』平22・3）。源氏と前斎宮の関係もその一つに挙げられている。

5 「旧訳」・「新々訳」が「もの」であることから、「新訳」初刊の「の」は誤植と判断した。

十五 「蓬生」

なし

十六 「関屋」

なし

十七 「絵合」

なし

十八 「松風」

- 1 「新訳」愛蔵本の「可愛らみい」は誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受け継ぐ。新書版・愛蔵版は「可愛らしい」。

二十四 「胡蝶」

なし

十九 「薄雲」

- 1 「旧訳」では、「新訳」初刊巻四19頁14行〜23頁2行に相当する箇所が削除されている。削除されているのは、冷泉帝が僧都から出生の秘密を聞くという内容である。

※前号掲載の表の訂正

・三・二「帯木」33のI欄 空欄(誤) ↓○(正)
・三・五「若紫」の注1 句点(誤) ↓読点(正)

二十 「槿」

- 1 「旧訳」では、「新訳」初刊巻四54頁7行〜55頁14行に相当する帖の末尾の箇所が削除されている。削除されているのは、源氏の夢にあらわれた藤壺が、密事が漏れたことの恨みを言うという内容である。

二十一 「乙女」

- 1 「旧訳」・「新々訳」、また原文が「大宮」であるため、「新訳」初刊の「お宮」は誤植と判断した。

二十二 「玉鬘」

- 1 「旧訳」・「新々訳」、また原文が「げん」であるため、「新訳」愛蔵本の「けん」は誤植と判断した。普及版は愛蔵本を受け継ぐ。新書版は「げん」、愛蔵版は「けん」。

二十三 「初音」

なし

別
表

花散里	賢木	葵	花宴	紅葉賀	末摘花	若紫	夕顔	空蟬	帯木	桐壺	帖
5	50	48	11	29	33	49	48	12	47	27	頁数
1	36	31	4	12	28	61	89	10	40	31	改訂数
0.2	0.72	0.65	0.36	0.41	0.85	1.24	1.85	0.83	0.85	1.15	改訂数／頁数
1	39	32	5	12	32	68	100	12	46	33	分類のべ数
0	3	0	0	3	0	13	21	3	6	7	A 1
0	2	7	0	0	4	12	12	4	8	0	A 2
1	8	8	2	2	9	16	15	1	1	0	A 3
0	0	0	0	0	0	6	21	1	17	12	B
0	1	0	0	0	0	1	4	0	4	2	C
0	5	4	1	0	4	6	10	2	2	1	D
0	2	5	1	2	7	5	4	1	3	3	E 1
0	1	1	0	1	1	0	2	0	2	3	E 2
0	6	2	0	3	6	9	4	0	1	1	F
0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	G
0	10	5	1	1	1	0	6	0	2	3	Q

計	胡蝶	初音	玉鬘	乙女	権	薄雲	松風	絵合	閑屋	蓬生	潯標	明石	須磨	帖
725	21	14	40	48	21	31	22	19	6	23	33	42	46	頁数
382	1	0	3	3	2	4	1	3	0	2	6	9	5	改訂数
0.53	0.05	0	0.08	0.06	0.1	0.12	0.05	0.16	0	0.09	0.18	0.21	0.11	改訂数／頁数
419	1	0	3	3	2	4	1	3	0	2	6	9	5	分類のべ数
58	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	A 1
50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	A 2
65	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	A 3
59	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	B
13	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	C
38	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	D
46	0	0	1	0	0	3	1	2	0	0	2	3	1	E 1
20	1	0	1	0	2	0	0	1	0	0	1	1	2	E 2
33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	F
6	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	G
31	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	Q

右の別表は、各帖の頁数・改訂数・一頁当たりの改訂数と、分類ごとの改訂数を一覧にしたものである。頁数は初刊による。改訂数は、初刊と愛蔵本の異同から

・初刊の再版の段階で改められたもの
・愛蔵本が誤植であるもの

を除いたものである。一頁当たりの改訂数（改訂数／頁数）は、小数点以下三桁を四捨五入した。

なお、分類は二種類以上にまたがる場合があるため、各帖の改訂の総数と、分類ごとの改訂数を合計したもの（分類のべ数）は一致しない。

*

「新訳」愛蔵本巻一・二の改訂の総数は、³⁸²例にのぼる。愛蔵本における改訂は、「旧訳」から「新訳」へ、「新訳」から「新々訳」へという（谷崎源氏）の二度の改訂に比べて目につきにくく、これまで見過ごされてきた。しかしそれは決して少なくない数行わたっていたのである。

別表上段の「桐壺」～「花散里」は愛蔵本巻一、下段の「須磨」～「胡蝶」は巻二の範囲に相当する。一見して分かるように、巻一と巻二とは、改訂数に大きなひらきがある。巻一の改訂数は、平均しておおよそ一頁当たり一例（^{0・96}例／³⁴³頁）だが、巻二は一頁当たり〇・一例（^{0・11}例／³⁵⁶頁）と、約一〇分の一に減っている。愛蔵本の序文には「特に巻一と巻二とは字句に修正を加へた箇所も少くない」と記されているが（一章参照）、巻一・二の改訂数の分布は均等ではなく、

巻一に集中していることが確認される。

また、分類ごとに見ると、敬語に関する改訂（A）が計173例（A 1 58例、A 2 50例、A 3 65例）と全体の約四割を占め、次いで音便に関する改訂（B）が59例と多い。敬語に関する改訂のうち（遊ばず）という単語がなくなるもの（A 1）と（思し召す）という単語がなくなるもの（A 2）、また音便に関する改訂（B）は、巻一の中でも前半部（「桐壺」～「若紫」）に多く見られる。A 1は、総数58のうち56例が巻一にあり、うち50例がその前半部にある。A 2は総数50のうち49例が巻一、うち36例が前半部にある。Bは、総数59のうち57例が巻一にあり、すべてが前半部にある。なお愛蔵本巻一の前半部は、初刊巻一の範囲に相当する。

一方、愛蔵本巻二は、改訂の数が少ないだけでなく、種類も表記・ルビに関するもの（E 1・E 2）が大半である。巻二の改訂総数39のうち、E 1・2が22例を占め、それ以外の種類はわずかしかない。他の種類の改訂が巻一に集中するなか、表記・ルビの改訂は巻一・二を通じて一定数見られるのである。なお、表記・ルビに関する改訂は、巻一・二だけでなく、全篇にわたって特定の単語を中心に確認される（補論参照）。

（中村）

「付記」

・執筆の分担は以下の通りである。

三・七「紅葉賀」～九「葵」

三嶋

三・十「賀木」～二十四「胡蝶」

中村

別表

中村

・本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（研究活動スタート支援22820031）の助成を受けたものである（中村）。

（なかむら ともえ・静岡大学専任講師）
（みしま じゅんこ・京都学園大学非常勤講師）